Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University（Psychology and Human Development Sciences）
2012, Vol. 59, 71 − 77.

心理面接室の改修に伴う面接者の空間イメージの変化と物理的要因の意味について

小 林 佐知子[1)]　　永 田 雅 子[2)]
松 本 真理子[2)]　　小 松 　 尚[3)]

問題

本研究は，心理面接室の適切な空間イメージを形成するために必要な構成要素を検討することを目的として，空間イメージに関連する物理的要因を明らかにするものである。心理面接室は，クライエントが安心して心を開くことができ，面接者が落ち着いてクライエントに向き合うことができる場である必要がある。静かでプライバシーが守られ，快適であり，クライエントがあたたかく迎えられるとともにゆったりとくつろげる雰囲気がある空間である（岡野，1980；鑪・名島，1983）。しかし，そのような空間イメージに対して，どのような物理的要因が影響を与えるのかについてはこれまでほとんど検討されていない。

心理面接の場は“非日常的な場面”であり，そこには外面的（物理的）な構造と内面的（心理的）な構造がある（田畑，2010）。前者は心理面接の場面そのものに関するものであり，面接者とクライエントの空間配置や時間，料金などの物理的要因が当てはまる。後者は治療契約や面接のルール，守秘義務など，面接者とクライエントの関係性に関するものである。これらは明確に区分できるものではないが，それぞれの構造要因が組み合わされて，心理的援助のための空間がつくられていると考えられる。面接者とクライエントを舞台上の俳優（主役はクライエント）に例えるならば，物理的要因は舞台装置や小道具といえるであろう。これらは周辺的な部分ではあるが，心理的援助の展開にも影響を及ぼす。森田・佐々木・坪井（2004）は，大学建物の大規模改修工事に伴い，大学附属の心理相談室が附属中・高等学校の建物へと一次的に移転をするという体験から，物理的環境の変化が相談活動に及ぼす様々な影響を検討した。その結果，環境の変化から面接者やクライエントが不安を感じたこと，移転後の面接室の壁の白さや窓がないことが圧迫感をもたらしたことなど，物理的な環境の変化は相談活動の外的枠組を揺らし，その揺らぎがクライエントへの理解の深まりや中断など，面接の展開に多様な影響を及ぼしたことを報告している。面接者とクライエント双方が安心して心理面接を展開することができる場を用意することは重要なことであり，どのような環境が有効であるのか検討することは意義深いと考えられる。

心理面接室の物理的要因に関する研究が少ない理由の一つには，多くの心理面接室が既設のものであり，複数の心理士やスタッフで共有することが少なくないことが挙げられる。実際の心理面接では，すでに決められた空間を，クライエントや面接の形態に合わせて工夫をしながら使用していることが多いと考えられる。心理面接室といっても，その機能は病院臨床，学校臨床，乳幼児臨床，個人開業など多岐にわたり，施設全体の機能に合わせて配置されることが多い。場合によっては，一部の空間を仕切って面接の場とすることもあるであろう。しかし，空間をどのように工夫するか，その方法は面接者の感性に任されており，具体的に何に配慮すべきなのかが曖昧である。「この部屋は何となく落ち着かない。」と感じたときに，心理士は何をどのように工夫すべきなのか。あるいは，新しい環境を作る機会を得たときにどの部分に配慮したらよいのか。これらは臨床経験の量を問わず，心理士の力量につながる重要な知見であると考えられる。

以上を踏まえ，本研究では面接者の面接室空間イメージに影響する物理的要因を明らかにする。物理的要因にはさまざまなものが考えられるが，本研究では，壁と床および調度品に焦点が当てられる。心理面接に適したあたたかみや落ち着きが感じられる壁・床・調度品とはどのようなものか，色や材質を中心に検討する。対象となる面接室は，臨床心理士養成大学院に附設する心理相談室内の面接室であり，第4面接室と呼ばれる部屋である。

1）大垣女子短期大学
2）名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター
3）名古屋大学大学院環境学研究科

第4面接室は，三人掛けの椅子や箱庭があるため，個人面接以外に親子面接や青年期に使用できるようになっている。ところが，他の面接室と比べて使用頻度が相対的に少ないため，より使用しやすい面接室にするために改修が実施されることになった。この機会を利用し，改修によって面接者の空間イメージがどのように変化したのかを明らかにし，物理的要因との関連について検討する。

方法

対象となる面接室　第4面接の写真をFigure 1に示す。第4面接室は約15m^{2}の空間である。壁はオフホワイト色，床は暖色系（やや濃い目の落ち着いたピンク色）のカーペットが敷かれている。窓はない。三人掛け用の青色の椅子が，茶色の机をはさんで対面式に配置されている。奥には箱庭用の砂箱と箱庭用のフィギュアが並んだ棚，事務用ロッカーが配置されている。小道具としては，机の上に置時計とティッシュ，壁に時計と絵画およびカレンダー，ロッカー上に観葉植物が飾られている。また，入口左手には水道がある。

第4面接室の変化を比較検討するために，改修が行われない第1面接室も調査対象とする。第1面接室の写真をFigure 2に示す。第1面接室は第4面接室に比べてやや狭い（約10m^2）。壁や床は第4面接室と同じである。窓があり，白いブラインドで目隠しされている。二人掛けの椅子と一人掛け用の椅子が二つ，ナチュラル色の机をはさんで配置されている。椅子の色はグレーベージュである。奥には飾り用の小さな机がある。小道具としては，中央の机の上にティッシュ，壁に時計とカレンダー，飾り用の机の上に観葉植物が置かれている。第4面接室と同様，入口左手に水道がある。

第4面接室と第1面接室の大きな違いは，窓の有無，部屋の広さ，家具の大きさ，ロッカーや箱庭の有無である。

改修のプロセス　改修の具体案は，建築空間や子ども

Figure 1　第4面接室（改修前）

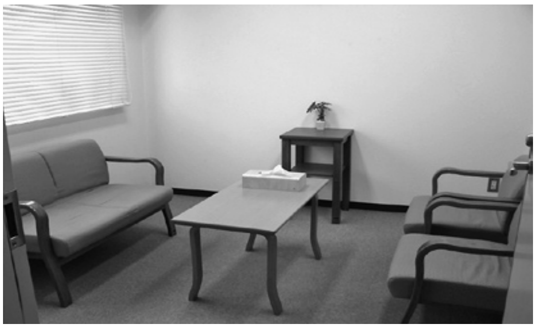

Figure 2　第1面接室

Table 1　改修内容

	改修の方向性	改修前	改修後
壁	あたたかく落ち着きがある	オフホワイト色	肌色に近いベージュ色 塗り壁調
床	あたたかく落ち着きがある	カーペット やや濃い目の落ち着いたピンク色	カーペット 小豆色系の細かいストライプ
机	室内全体に統一感がある	四角 茶色の木製 脚はスチール製	角が丸い四角 濃い茶色の木製
椅子	室内全体に統一感がある	三人掛長椅子×2 青色 脚はナチュラル色	二人掛長椅子×1 一人掛椅子×2 明るいグレー 脚は濃い茶色
キャビネット	室内全体に統一感がある／描画法の道具や遊具（折り紙，ボードゲーム等）を入れる機能がある	事務用ロッカー	濃い茶色の木製 3段

の居場所を建築学の視点から研究している専門家の助言を取り入れながら，臨床心理学の教員と助手で協議がなされた。改修の方向性として壁と床をもっとあたたかみがあり，落ち着きがあるものに変えること，調度品の色をそろえ，統一感を出すこと等が挙げられた。材質，形，色を具体的に選択する段階では，相談室スタッフである大学院生も協議に参加した。改修内容はTable 1の通りである。改修後の第4面接室の写真をFigure 3に示す。

調査手続き　改修約1週間前に第1回目の質問紙調査を，改修約1週間後に第2回目の質問紙調査を実施した。調査を実施する際には調査の趣旨と個人が特定されないこと，研究以外の目的には使用されないこと等を文書にて説明した。一部のスタッフには連絡用のレターケース等を用いて個別に依頼した。改修工事は2012年3月に行われた。

調査対象者　名古屋大学心理発達相談室の相談室スタッフ75名を対象とした。相談室スタッフは，教員，指導員，院生，相談員，事務職員から構成される。改修前は58名（回収率77%），改修後は29名（回収率39％）から回収された。改修後の調査については，調査時期が年度末にかかり，スタッフの交代の時期と重なったことが回収率の低さに影響した。

調査内容

① 面接室空間イメージ尺度：渡辺・小高（2006）の学校場面における居心地の良さ・悪さに関する尺度を参考に，面接室空間イメージ尺度を作成した。「近い」－「遠い」のように形容詞が対になっているSD法によるものであり，13項目から構成される。“どちらでもない”を中央に配置し，“とてもあてはまる”まで形容詞の当てはまりの程度を7件法で評定した。項目内容はFigure 4の通りである。

② 自由記述：相談活動をする上で第4面接室についてどのように感じるか自由記述を求めた。自由記述の結果は，相談室スタッフである助手および大学院生（教育発達科学研究科心理臨床科学領域）計4名にてＫＪ法を用いて分析した。

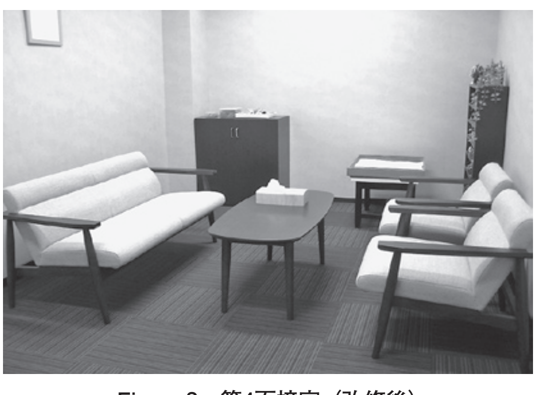

Figure 3　第4面接室（改修後）

結果

1．第1面接室と第4面接室の空間イメージの比較

第1面接室と第4面接室の空間イメージ尺度を比較した。それぞれの評定の平均値についてのプロフィールを示す（改修前：Figure 4，改修後：Figure 5）。項目ごとにt検定を行った結果，改修前は「かたい―やわらかい」「暗い―明るい」以外の項目に差がみられた。第4面接室は第1面接室に比べて，「遠い」（t (54) = − 4.2, p < .001），「つめたい」（t (55) = − 2.2, p < .05），「じめじめした」（t (55) = − 3.1, p < .01），「雑然とした」（t (55) = − 7.0, p < .001），「騒々しい」（t (55) = − 5.6, p < .001），「不快」（t (55) = − 2.5, p < .05），といった冷暗で落ち着きのないイメージがある一方，「広い」（t (55) = 11.8, p < .001），「わくわくする」（t (55) = 2.2, p < .05），「開放的」（t (55) = 4.5, p < .001），「にぎやか」（t (54) = 3.0, p < .01），「のびのびした」（t (55) = 6.9, p < .001）という広くてのびやかなイメージがあるといえる。改修後は，以下の8項目

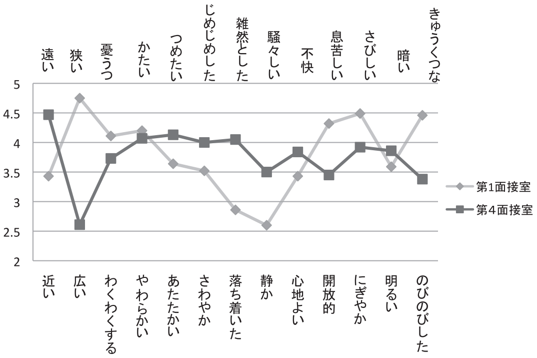

Figure 4　第1面接室と第4面接室の空間イメージの比較（改修前）

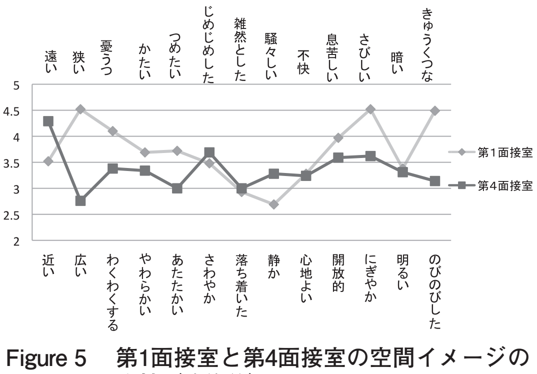

Figure 5　第1面接室と第4面接室の空間イメージの比較（改修後）

に差がみられた。第4面接室は第1面接室よりも「広い」(t (28) = 5.7, p < .001),「わくわくする」(t (28) = 4.1, p < .001),「あたたかい」(t (28) = 2.1, p < .05),「にぎやか」(t (28) = 3.9, p < .01),「のびのびした」(t (28) 4.7, p < .001),「遠い」(t (28) = − 2.2, p < .05),「騒々しい」(t (28) = − 2.3, p < .05) というイメージであった。改修前の広くてのびやかなイメージに加えてあたたかさが加わったこと,冷暗なイメージが軽減されたことが示唆された。

2．第4面接室の空間イメージの継時的変化

改修前後で第4面接室が継時的にどのように変化をしたのかを調べるために,2時点間のt検定を行った(Figure 6)。その結果,有意差が認められたのは,「憂うつ―わくわくする」(t (73) = − 2.0, p < .05),「かたい―やわらかい」(t (66) = − 3.1, p < .01),「つめたい―あたたかい」(t (57) = − 4.4, p < .001),「雑然とした―落ち着いた」(t (69) − -4.4, p < .001),「不快―心地よい」(t (50) = − 2.9, p < .01),「暗い―明るい」(t (63) = − 2.2, p < .05) であった。改修前に比べて,あたたかみや落ち着きなど居心地のよさを感じる方向に変化したことが示唆される。

3．自由記述による印象の変化

第4面接室の印象に関する自由記述の内容をＫＪ法にて分類した。結果をFigure 7, 8とTable 2に示す。改修前は広さや箱庭があるといった機能的な面が利点として挙げられていたが,改修後は明るさ,落ち着き,あたたかさ,おしゃれ感といった空間イメージに関する利点が多く挙げられた。改修前に感じられた暗さや閉塞感は低減されていた。ただし,落ち着きのなさや重たさ,女性的といった否定的なものもみられた。また,改修前は広さについて賛否両方の意見がみられたが,改修後は広さを否定的に感じる意見が多かった。

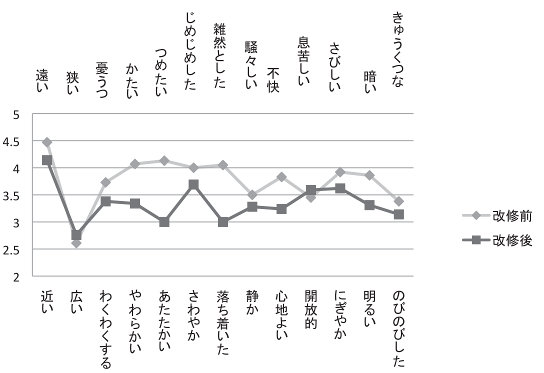

Figure 6　第4面接室の空間イメージの継時的変化

考察

本研究は,面接者における心理面接室の空間イメージに影響する物理的要因について検討するものであった。物理的要因として,壁や床の色や質感,調度品に焦点が当てられ,これらが空間イメージに及ぼす影響を検討した。

改修前後でSD法を用いて第1面接室と第4面接室との空間イメージを比較したところ,改修前は,第4面接室は第1面接室よりも冷暗で騒がしいイメージと広くてのびやかなイメージがあることが示された。自由記述の分析結果から,部屋の広さや調度品等に問題があることが示唆された。部屋の広さについては,「クライエントとの距離がある」という心理的な距離感に反映されており,物理的な距離が心理的な距離に影響していることが示唆される。暗さについては,第4面接室に窓がないことが影響している可能性がある。箱庭やロッカー,机,椅子の調度品に関しては,自由記述で落ち着きのなさや違和感,統一感のなさ等の記述がみられた。箱庭はできればカバーで覆うなど,視界から遠ざけるような対処方法が必要かもしれない。ロッカーのように,事務的なデザインの調度品はなるべく省く必要があるであろう。なお,第4面接室を「広すぎる」と感じる面接者がいる一方で,第1面接室には狭さや窮屈さを感じる面接者がいた。国分(1979)は,「胎内復帰願望を刺激して,かまえがとれリラックスした気分になる」ため,部屋の広さは小じ

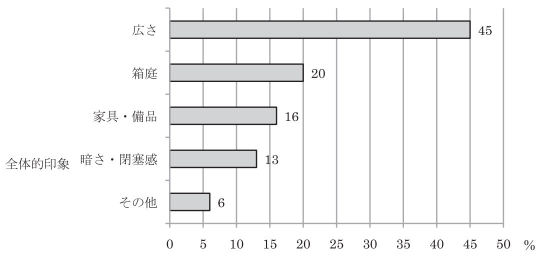

Figure 7　第4面接室の印象(改修前)

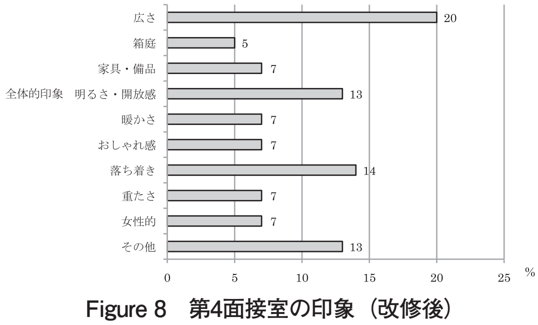

Figure 8　第4面接室の印象(改修後)

Table 2　自由記述の結果

改修前		改修後	
カテゴリー	具体例	カテゴリー	具体例
広さ	開放感がある	広さ	少々広さを感じる
	のびのびしている		ソファまでが遠い感じ
	広いと感じる	箱庭	箱庭が使いやすい
	広すぎてClとの距離を感じる		箱庭の棚に手が届きやすい
箱庭	箱庭が利用できる	家具・備品	ソファーが落ち着く
	箱庭の雰囲気が良い		キャビネットが良い
	成人面接に不向きである	全体的印象	
	視界に入ると落ち着かない	明るさ・開放感	壁の色が明るい
家具・備品	ロッカーは必要ない		広いので開放感がある
	ロッカーに違和感がある	あたたかさ	壁の色が変わり,あたたかい雰囲気になった
	統一感がない		床の色のおかげかあたたかい印象になった
	ソファが使いにくい	落ち着き	家具がシックで落ち着く
全体的印象			とても落ち着いた雰囲気
暗さ・閉塞感	閉じ込められた感じがする		床がにぎやかに感じる
	重くて暗い印象		壁が明るく，慣れるまで落ち着かない
その他	ゆるさを感じる	おしゃれ感	モダンできれいだと思った
	思春期に良い		素敵な色合いだと思う
		重たさ	床の色に若干圧迫感がある
			少し重い印象がある
		女性的	女性的な雰囲気がある
			男性には少し使いにくい
		その他	廊下と別れて独立した部屋に見える
			日常性が高いと思う

んまりとしている方がよいとしている。第4面接室の広さ（約15m^2）と第1面接室の広さ（約10m^2）の中間程度が，小じんまり感を実現できる程良い広さなのかもしれない。

改修後は，遠さや騒々しさは軽減されなかったが，改修前にはみられなかった「あたたかさ」が加わり，冷暗なイメージが軽減されたことが示唆される。継時的な変化を調べた結果からは，あたたかさや落ち着き，居心地のよさ，明るさが改修後に高くなっており，より適切な方向へ変化したといえる。KJ法の結果から，冷暗さを低減し，あたたかさを生みだしたのは壁や床の色が明るくなったことであると考えられる。窓がない部屋では，壁や床の色を工夫することが有効であるといえる。環境デザインの専門家からは，壁や床を張り替える作業が不可能な場合は，タペストリーやラグなどあたたかみのある色調の布類を用いる方法も有効であるという助言があった。しかし，壁や床の色の明るさは，「騒々しさ」の原因にもなっていた。色が濃くなったことにより，重たさや女性性を感じる面接者もいた。ただし，「慣れるまで落ち着かない。」という声があるように（Table 2），改修1週間後の時点では，改修前後のギャップに慣れていない可能性も考えられる。また，調度品に関しては，キャビネットや机，椅子の色などの材質を統一したことにより，落ち着きが感じられるようになった。調度品の色や材質は可能な限り統一することが有効であると考えられる。広さについては,改修前は賛否両論であったが,改修後はネガティブに感じる方向に変化した。調度品の変更に伴い，改修前よりも物理的に空間が広くなったことが影響しているのかもしれない。広さの解消については今後のさらなる検討が必要と考えられる。

以上，今回の調査から心理面接室の空間イメージに関する物理的要因の一部が明らかにされた。クライエントと面接者との関係性に加え，このような視点から環境づくりを心がけることは，面接者とクライエント双方が安

心して心理面接を展開する上で意義深いことと考えられる。

今後の課題

本研究における調査対象者は相談室スタッフのみであったが，クライエントにとって適切な空間であるためには，今後はクライエント自身に調査をする必要がある。また，今回の調査では壁や床の色や材質，調度品に焦点が当てられたが，面接室の居心地の良さに影響するものとして，他にも照明や温度，湿度，通風，におい，隣接した部屋からの音等多くの要因が考えられる（岡野，1980）。さらに，椅子の向きなど面接者とクライエントの位置も重要な意味をもつ（神田橋，1984）。また，面接者の服装や表情，仕草や雰囲気といった面接者自身も面接室における環境の一部である。今後は今回扱われなかった物理的要因を含め，さらに幅広く，より良い面接室環境について検討していきたい。

引 用 文 献

神田橋條治（1984）．精神科診断面接のコツ　岩崎学術出版社

国分康孝（1979）．カウンセリングの技法　誠信書房

森田美弥子・佐々木美恵・坪井裕子（2004）．相談室の移転が相談活動に及ぼした影響：物理的環境の心理的意味を考える　心理臨床－名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理発達相談室紀要，19，3-13.

田畑治（2010）．臨床心理面接の場のイメージ：臨床心理士養成大学院生の描画を通して　愛知学院大学論叢　心理科学部紀要，6，29-43.

鑪幹八郎・名島潤慈（1983）．心理臨床家の手引き（第3版）誠信書房

岡野弘（1980）．面接：その心理と論理　高文堂出版社

渡辺弥生・小高佐友里（2006）．高校生における「居場所」としての学校の認知について　法政大学文学部紀要，53，1-15.

付記

本論文の作成にあたり，ご助言を賜りました愛知学院大学の田畑治先生，名古屋大学の森田美弥子先生に深く感謝致します。

また，調査にご協力いただきました相談室スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

（2012年8月31日受稿）

原　　　　　　著

ABSTRACT

Changes in images of a counseling room after renovation and the physical characteristics

Sachiko KOBAYASHI, Masako NAGATA
Mariko MATSUMOTO and Hisashi KOMATSU

This study examined the changes in the images of a counseling room after renovation from a viewpoint of the physical characteristics. One of the counseling rooms (Room 4) of the psycho-development clinic at Nagoya university underwent renovation. We conducted an investigation on the clinic staff's images of the counseling room before and after the renovation.

After the renovation, the room was perceived to be less “noisy” and “cold”. Moreover, the room was perceived to be “warmer” and “more calm”. The results suggest that (1) when the counseling room did not have a window, the color of the walls and floor should make brighter, (2) the office-like furniture was unnecessary, and, as far as possible, it should excluded from counseling rooms, (3) furniture should be well-matched in terms of color and material, and (4) the optimum physical distance between the counselor and client should be maintained, because this distance influences the psychological distance between the two.

Key words: counseling room, images, physical characteristics